

次の文は『無名草子』の一節で、数人の女房が、文芸世界における女性の評価をめぐって、話し合っている箇所である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

「いでや、いみじけれども、女ばかりくちをしきものなし。昔より、色を好み、道を習ふともがら多かれども、女の、いまだ集などえらぶことなきこそ、いと口惜しけれ。」といへば、「必ず、集をえらぶことの

□

。紫式部が『源氏』を作り、清少納言が『枕草子』

を書き集めたるより、さき(注)に申しつる物語ども、多くは女のしわざに侍らずや。されば、なほ捨1て難きものにて、我ながら侍り。」といへば、「さらば、なか世の末にとどまるばかりの一ふし、書きとどむるほどの身にて侍らざりけむ。人の姫君・北の方などにて、かくろへばみたらむ人はさることにて、宮仕へ人としてひたおもてにいでたち、なべて人に知らるばかりの身をもちて、Iこの頃はそれこそ。」など人にもいはれず、世の末までも書きとどめられぬ身にてやみ(a)なんは、いみじく口惜しかるべきわざなりかし。昔より、如何ばかりのことかは多かめれど、あやしの腰折れ一つよみて、集2に入ることなどだに、女はいとかたかめり。まして、世の末まで名をとどむBばかりの言葉いひ出で、し出でたるたぐひは、少なくこそ聞え侍れ。いとありがたきわざ(b)なんめり。」

などいへば、例の若き人、「さるにても、誰たれか侍らむ。昔今ともなく、おのづから心にくく聞えむほどの人<sup>3</sup>びと思ひ出でて、その中に少しもよからむ人のまねをし侍らばや。」といへば、「も<sup>II</sup>のまねびは人のすまじかなるわざを。淵に入り給ひなんず。」といひて笑ふ。

(注) さきに申しつる物語ども——右の文の前に、『源氏物語』『狭衣物語』『夜半のねざめ』『浜松中納言物語』等の物語について述べた文がある。

問一 傍線部I「捨て難きもの」について、何が捨て難いのか。次の中からもっとも適当なものを選び、その記号を記せ。

イ 女    ロ 色    ハ 道    ニ 集    ホ 物語

問二 傍線部I・IIの解釈としてもっとも適当なものを、それぞれ次の中から選び、その記号を記せ。

I この頃はそれこそ。

イ 最近の秀歌といえはこれだ。

ロ 最近の傑作物語といえはこれだ。

ハ 最近の優れた物語作家はあの人だ。

ニ 最近の優れた歌人といえはあの人だ。

Ⅱ ものまねびは人のすまじかなるわざを。

イ ものを学ぶことは、人がしなければならぬことであるのに。

ロ ものまねは、人のしてはならないことであるのに。

ハ 歌のまねは、人がしそうなことであるが。

ニ 学問は、人がたやすくできないことであるが。

問三 傍線部2の「集」は、次の中のどれに当たるか。もつとも適当なものを選び、その記号を記せ。

イ 漢詩集      ロ 私家集      ハ 連歌集      ニ 勅撰和歌集      ホ 歌謡集

問四 傍線部A「ひたおもてにいでたち」、B「世の末まで名をとどむばかりの言葉」と対比的に用いられている語句を、それぞれ文中から抜き出して記せ。

問五 傍線部3は、どういう「人びと」か。漢字四字（普通名詞）で答えよ。

問六 次の各語を、活用語は適宜活用させて組み合わせ、文中の  にふさわしい表現とした場合の、上から五番目(イ)と八番目(ロ)の文字を記せ。

あり      も      ず      いみじ      なり      べし

問七 傍線部(a)・(b)・(c)の「なん」は、それぞれ次のどれに該当するか。もつとも適当なものを  
選び、その記号を記せ。

イ 係りの助詞

ロ 完了の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「ん」の連体形

ハ 完了の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「ん」の終止形

ニ 完了の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「んず」の一部

ホ 断定の助動詞「なり」の連体形「なる」の音便